The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	消された歴史，語り得ぬ過去 ： オーストラリアにおけるアボリジニーの自己表象
Author(s)	小杉，世
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2002, 2001, p. 35-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77303
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

消された歴史，語り得ぬ過去

—オーストラリアにおけるアボリジニーの自己表象—

小杉　世

> Once we were declared not to be, our land was said to be a *terra nullius*, a land of vacant of people. Our land suffered and we suffered and it is only now that there seems to be a hope that we are entering a time of healing.（Mudrooroo, 1995）[1]

1．はじめに

昨年のプロジェクトの論文では，ニュージーランドにおける白人作家とマオリ作家の主体形成の問題を論じた。今回はオーストラリアにおけるアボリジニー作家たちの自己表象について考えてみたい。まだ十分に広く文献を読めてはいないが，とりあえずは今の段階でおぼろげに見えているヴィジョンの外郭を報告書としてまとめてみようと思う。

ニュージーランドでは，70 年代の民族運動，80 年代のマオリ語公用語化など言語政策の進む時期に，Patricia Grace などが，マオリ語と英語の混淆した独特の文体で小説を書いている。それに対して，いわゆる "Aboriginal English" で書かれた小説というのはあまりないのではないだろうか。日常のコミュニケーションの次元では，ピジン英語が用いられていても，それが小説や詩などのテクストになることはあまりない。[2] もともと部族語が 200 以上あったアボリジニーの言語の場合には，マオリ語と違って，公用語化は勿論のこと，学校教育による普及，復興も難しいという事情もあるのだろう。

オーストラリアのアボリジニーの作家には，語ることへの躊躇のようなものが，マオリ作家の場合よりも強く感じられる。Mudrooroo は，「ヨーロッパ人たちがこの大陸にやって来てアボリジニーの土地を奪い，所有したその歴史は，アボリジニーの長い歴史の中のほんの幕間 ("an interlude") に過ぎない」[3] と述べるが，まさにその幕間に生まれ育った世代

---

[1] Mudrooroo, *Us Mob: History, Culture, Struggle: An Introduction to Indigenous Australia,* (Sydney: Angus & Robertson, 1995), p. 237-238.

[2] Patricia Grace の *Potiki* (1986)と Sally Morgan の *My Place* (1987) は，マオリ文学，アボリジニー文学の成熟期の作品であるが，Morgan の *My Place* は非常に標準的な英語で書かれており，マオリ語の混淆した Grace の英語とは，かなり文体的に異なる。Morgan のテクストに埋め込まれた "Daisy Corunna's Story" は非標準的な語りの英語をそのまま表記しているが，それも人間が肉声で語るときの微妙なアクセントを伝えるのは難しい。ピジン英語ではなく，アボリジニーの部族語で書かれた詩はいくつかある。Kevin Gilbert, ed, *Inside Black Australia: An Anthology of Aboriginal Poetry* (Ringwood: Penguin, 1998) 参照。

[3] Mudrooroo, *Us Mob*, p.iv.

にとって，消し去られた彼らの歴史を回復することは，容易な課題ではない。歴史記述において「消去・忘却」された「先住民の過去」すなわち「マイノリティ・ヒストリー」を＜大きな物語（マスター・ナラティヴ）＞あるいは「ナショナル・ヒストリー」に取り込まれることなく，いかに表象し得るかについては最近，議論も交わされている。[4] 本稿では，Mudrooroo (1938—)，Sally Morgan (1951—)，Ruby Langford Ginibi (1934—) などのアボリジニー作家のエッセイや自伝小説，絵画をとりあげ，アボリジニーの自己表象について考察する。

エピグラフにもあるように，オーストラリア大陸はヨーロッパ人が入植し始めたとき，"Terra Nullius" (誰のものでもない土地) と呼ばれた。すでにその何万年も前から（彼らの表現を借りれば創世神話の時代ドリームタイムから）アボリジニーはこの土地で先祖や動植物と共に生きてきたのであるが，白人入植者にとって彼らは土地の背景の一部に過ぎず，「人間」ではなかった。ヨーロッパ人たちはアボリジニーを虐殺し，実際に彼らの多くを土地から消し去った。[5] さらにコロニアル時代が過ぎ去った後も，生き残ったアボリジニーたちは，長い間，社会の中で「彼らの場所」を認められずにいた。連邦政府の憲法改正によってアボリジニーが初めて国勢調査の対象となり，法的に「オーストラリア国民」と認められたのは 1967 年である。三重の意味で消し去られた存在であった彼らが，その歴史を語りはじめたのは，まだ最近 (1970 年代以降) のことである。[6]

2．Sally Morgan：*My Place* (1987) [7]

Sally Morgan の自伝(小説) *My Place* は，アボリジニーの血をひく著者が，自らのルーツ ('my place') を求めて，祖母が昔働いていた西オーストラリア北部のコランナ・ダウンズ牧場を訪ね，血のつながった多くの人々（生きていることさえわからなかった）に出会って，過去を少しずつ解き明かしていく探索の物語である。この自伝が書かれたのは，オーストラリア建国 200 年の一年前，その翌年にはそれまで英語名を名乗ってきた何人かのアボリジニーの作家たちが，部族名で執筆活動を始めるという象徴的な行為[8] によっても示されるように，オーストラリアにとって，またアボリジニーの人々にとって，彼らの歴史を捉え直す重要な転換期であった。

サリーとその妹弟は，幼い頃友人たちからイタリア人か，ギリシャ人か，それともインド人かとよく尋ねられたという。サリー自身は幼い頃，自分の先祖はインド人だと思いこんでいた。母親グラディスや祖母デイジーからそのように教え込まれていたのだ。サリー

---

[4] 保刈実「アンチ・マイノリティ・ヒストリー：ローカルかつグローバルな歴史へ向けて」『現代思想』(2002 年 1 月号)，pp.20-32.

[5] 特にタスマニア島では，開拓時代，自由人は一人当たり 5 人もの囚人を労働力として割り当てられていたので，先住民を労働力とする必要がなく，彼らは「害獣」として撃ち殺された。『知っておきたいオーストラリア・ニュージーランド』（青木書店, 1999）p.58.

[6] "Indigenous people did not turn their attention to their history until the 1970s." (Mudrooroo, 1995, p.181)

[7] Sally Morgan, *My Place* (Fremantle: Fremantle Arts Centre Press, 1987). 引用頁数はこの版による。引用の日本語訳は加藤めぐみ訳『マイ・プレイス』（サイマル出版会, 1992) を参考にさせていただいた。

[8] Mudrooroo (Colin Johnson) もその一人。『マイ・プレイス』p.10 参照。

の父親ビルは白人であり，母親グラディスは比較的肌の色の薄いハーフ・カーストのアボリジニーである。当時白人の血の混じったアボリジニーの子供は，白人の父親が家にいない限り，アボリジニーの母親が育てられないことになっていた。ビルが亡くなった後，福祉局に子供を連れ去られるのを恐れたグラディスとデイジーは，誰にも自分たちがアボリジニーであることを言わなかったのである。母親が初めてアボリジニーであることを口に出してはっきりとサリーに認めたのは，サリーが大学生のとき，1973 年頃であった。アボリジニーであることがようやく「恥」ではなくなった時代だろうか。サリーは，母や祖母や大伯父さんアーサーから昔の話を少しずつ聞き出し，本にまとめる決意をする。*My Place* には，彼らが語った物語，“Arthur Corunna's Story”, “Gladys Corunna's Story”, “Daisy Corunna's Story” が埋め込まれている。都会の郊外で，自らがアボリジニーであることも知らずに育ち，アボリジニーの知人もなく，採取，狩猟の生活をしたことも，コロボリー（部族の舞踏祭）に参加したこともない自分のような者にとって，アボリジニーであることは一体何を意味するのかと，サリーは自問する。この自伝が呈示するのは，このように自らの民族性を主張することの正当性を認められず，[9] どこにも属さない主体の抱える問題である。

サリーの祖母デイジーやその兄アーサーは，二人とも生まれた年も父親が誰であるのかも，はっきりとはわからない。当時はアボリジニーには出生証明書などなかった。法的には彼らは存在しなかったのだから。父親がわからないのはサリーの母グラディスも同じである。(デイジーとアーサーの父親はおそらく白人の牧場主なのだが，グラディスの父親が誰であるかは最後までデイジーは語らない。）サリーはこれらの空白を埋めようとする。

この自伝小説のテクストには二つの語られない (語りつくされない) 歴史がある。一つは語り手のアボリジニーの祖母が決して明かそうとしない過去の話，そしてもう一つはサリーの父親が体験した第二次世界大戦の戦場での体験である。アボリジニーへの偏見の強い南部の田舎町で育った白人のオーストラリア人であるビルは，肌の黒いアボリジニーの義母デイジーのことを “a bloody nigger” (427) と呼んで嫌っている。にもかかわらず，この二人の間には，語り得ない過去の重荷を負う者同士の絆がある。ビルは激戦地の一つであったエジプトの El Alamein で捕虜になり，イタリア船で輸送される途中，イギリス潜水艦の魚雷に見舞われてギリシャに漂着する。レジスタンスの助けを借りて，逃亡するがイタリア警察に捕まり，ドイツの捕虜収容所へ送られた。どこか感じやすいところのあるビルは，戦争の精神的後遺症から立ち直れず，酒に酔うと妻や子供を殺しそうになる自分自身 (正気のときの彼は家畜の鶏も殺せないのであるが) に恐れを感じて，精神病院へ逃げ込む。[10] 娘サリーや妻グラディスの言葉を通して語られるビルの戦争の記憶の光景は，かなり生々しい。砂漠での戦闘，輸送船の爆発で吹き飛んだ何百人もの捕虜の死体（腕や脚や内蔵の一部）に埋まって，どれが自分の手足かそうでないのか見分けがつかなかったと

---

[9] サリーはアボリジニーの奨学金を受けたが，アボリジニーではないと中傷され，委員会に呼び出される。
[10] サリーが幼い頃，母に連れられて父を見舞った精神病棟には，戦争で身体的，精神的な傷を受けた患者たちが多くいた。彼らの物語もまた，オーストラリアの語られない歴史のひとつである。

いう話，魚雷で裂けた船腹の穴にひっかかり引きちぎられる生きた人間の身体，捕虜収容所で食べた馬の頭のスープ，べっとりと皿一杯にもられた馬の毛，唯一の肉片である馬の目を奪い合う兵士たち，ドイツ人司令官に裸にされ雪の中に何時間も立たされた夜，近くのユダヤ人強制収容所から漂ってくるにおいと物音。ビルは終戦後15年経ってもなお悪夢にうなされ，サリーが9歳のとき自殺する。[11] 夫の戦争体験を語るグラディスは，彼から聞いた話は「氷山の一角」に過ぎず，彼は決してすべてを語ろうとはしなかった，「人に話すにはあまりにも自尊心が傷つくことがあったのだろう」と述べる。

デイジーもまた，過去を語ることを拒否して，ずっと沈黙を守ってきた。サリーやグラディスが昔のことを聞き出そうとすると，決まってデイジーは身構え，怒ってどこかへ行ってしまう。死の床について初めて彼女は語りはじめるが，それでもなお，「秘密は墓にもって行く」というデイジーは，サリーが知りたがっている歴史の空白部分を決して語ろうとしない。結局，読者は（また著者自身も）過去の一部は知らされないまま自伝は終わる。二つの歴史の「語り得ぬ」ことを描いた自伝小説であるが，祖母のアボリジニーの過去と父親の戦争体験，この両者を比べれば，父親の戦争体験の方がより言葉にして語られている。白人とアボリジニーに共通したオーストラリアのもう一つの傷である戦争体験を白人の父親に代わって語ることは，さらに言葉にすることの難しいアボリジニーの消された歴史を語ることの代償行為となっている。最も難しいのは自らの存在の根源について語ることなのだろうか。

この語ることへの躊躇は，たとえば，アボリジニーではない作家がアボリジニーの登場人物を描くとき，その内面を非常に克明に言語化する例と対照をなす。入植時代のタスマニアを舞台にしたMatthew Knealeの小説 *English Passengers* (2000) には，アボリジニーの少年 Peevay が視点人物の一人として登場する。ここで詳しくは論じないが，小説の冒頭で少々わかりにくい英語で書かれていたPeevayの思考は，小説が進むにつれて，その「異質性」を失い，段々と読みやすく透明な文体になっていく。そこには，語ることへの抵抗というような意識は見られない。

この自伝小説の中で，それぞれの物語を語る三人の人物たちのうち，最初にサリーに過去を語り始めたのはアーサーである。アーサーは妹のデイジーのように長く白人と一緒に暮らすことはなく，アボリジニーの部族長（boolyah man）であった育ての父親を誇りに思っている。土地を自らの手で開拓したことに誇りをもち，アボリジニーが受け継いでいる精神の強靭さを信じるアーサーにとって，過去を語ることはそう困難ではない。「今あるMukinbudinの町はアボリジニーが力を出した結果」であるというアーサーにとって，過去を語ることは，自らが「ナショナル・ヒストリー」に貢献してきたことを主張する行為である。[12] 過去を語ることに最も困難を覚えるのは，屈辱以外に何の誇るべき手柄もなく，

---

[11] シェルショックの神経症患者はHemingwayやV. Woolfなどの英米モダニズム小説にもよく出てくるが，これを読めば，たとえば，Woolfが描くシェルショックの精神病者セプティマスの見る幻覚の牧歌的な表象には，戦争のリアリティがいかに希薄であるかがわかる。

[12] 保刈 (2002), p.22. 「オーストラリアの北部辺境におけるアボリジニと植民地牧場業との交渉史は，新

白人の価値観をすり込まれて育った祖母デイジーである。身にしみこんだ社会への不信感。未だに役人や政府を恐れて信用せず，アボリジニーであることを偽る祖母。彼女は家族にさえ本当の歴史を語らず，部族の言葉をしゃべれることも娘や孫に隠している。屈辱的な体験を誰も無理に強いて聞き出すことはできない。「獣」扱いされた過去を思い出すこと自体が人間の尊厳を保つことを危うくするのだとしたら。そんな倫理的な問題を著者は問いかけてもいる。長い間隠してきた過去をそう簡単に語れるものではないだろう。しかし，語らないのならば自伝を書くことにどんな意味があるだろうか。以降，この自伝テクストのもう一つの意義について考えてみたい。

オーストラリア北西海岸の町におけるアボリジニーと日本人移民（真珠貝採取のダイバー）との交渉史を論じる保刈は，「地方性（ローカリティ）」を「異なる文化，異なる地方，異なるネイションの＜結節点＞」として捉える。「マイノリティの過去」を「グローバルな歴史」に「接続する」ことによって，「多国籍で複数文化に支えられた接合の連鎖」として「＜マイノリティの歴史＞を脱周縁化する」という保刈の試みは，「少数民族や先住民族のネットワーク」で世界各地の「ローカルな地点」を繋ぎ合わせ，「覇権的国民国家によるエリートの世界史」とは異なる「サバルタンの世界史」を構築しようとするものである。[13] *My Place* のテクストもまた，このようなグローバルな先住民族（あるいはサバルタン）のネットワークの結節点となり得る可能性を秘めているのではないだろうか。アメリカの黒人女性作家 Alice Walker はこの自伝を読んで，「『黒い仲間』のひとりであることの幸せを感じた」[14]と述べている。Walker は次のように評する。

> This sad and wise and funny book is of inestimable value in comprehending the relatedness of the global community . . . . Sally Morgan's love for her own spiritual and racial roots and her struggle to uncover them reveals a new Australia and a new way to embrace the elders and the young of all our peoples, wherever (and whoever) they might be. （下線は筆者）

Walker が "the relatedness of the global community"と呼ぶのは，Morgan の自伝のテクストがアボリジニーとユダヤ人，アメリカの黒人などの間にネイションや文化や政治を越えた「共感の共同体」とでもいうべきものを生みだしているからだろう。この自伝でしばしば繰り返される表現の一つは，「獣のような扱いをされた」とか「虐げられた動物のような」という比喩である。これらの表現はサリーの祖母デイジーがアボリジニーの過去の歴史や現在の出来事[15] を語るときにも，ビルがいた捕虜収容所の近くのユダヤ人強制収容所について言及するときも用いられる。先祖の土地を失い，自分の国に「居場所」をもたず，白人に「好きなように」扱われてきたアボリジニーの境遇をデイジーはユダヤ人のそれと重ね合

しいナショナル・ヒストリーを紡ぎだす格好の舞台となった。」

[13] 保刈 (2002), p.27, 29. 1979 年以降の "[G]lobal indigenous and post-colonial movements" については，Brian Galligan, Winsome Roberts, Gabriella Trifiletti, *Australians and Globalization: The Experience of Two Centuries* (Cambridge: Cambridge UP, 2001), p.186 参照。

[14] 『マイ・プレイス』上巻 p.11.

[15] 癌で入院したデイジーは，裸にされ研修医の模擬試験に使われる。

わせる。("we're like those Jews" 130)　戦争で精神的打撃を受けたビルに同情するデイジーは，同時にベトナム戦争の後遺症に苦しむアメリカ兵士たちへのシンパシーを感じている。さらに，第二次大戦中，アボリジニーが日本兵を奥地へ案内するのではないかという危惧から，アボリジニーを Moore River の Palm Flats の囲い地 (compound) に連れてきて監視したというアーサーの語る話からは，敵地で捕虜収容所に入れられたビルと，自分の国にいながら "compound" に囲いこまれたアボリジニーの体験[16] が重ね合わせられる。このように Morgan の自伝は，その内部に語り得ない歴史の沈黙を内包しながらも，人種やネイションを越えて人々の間に共感を生むテクストとなっている。サリーがこの家族史を本にしようと決意した 1979 年というのが，Galligan らが論じるところの「地球規模での先住民運動」("global indigenous and post-colonial movements"186) が盛んになって，ネットワークの形成されていく時期であるのは，偶然の一致ではないだろう。Morgan のこの処女作が出版と同時にベストセラーとなったのは，そのようなグローバルな「共感の共同体」がすでに存在していたからではないだろうか。

3．Sally Morgan の絵画：アボリジニーの歴史の表象

Sally Morgan は児童文学（絵本）や自伝小説を書くと同時に，画家としても活躍している。そのことは彼女の語りのあり方と無関係ではないだろう。絵画は，文章にくらべて，より抽象的な表現が可能である。Morgan はインタビューで次のように述べている。

> Paintings should speak for themselves. People should feel them. One of my continuing frustrations with the visual arts . . . is that . . . people will . . . ask me to explain in detail what the image is about. I don't really like explaining in detail what my images are about because I think image loses in the verbal translation. I can often express a feeling better in an image than I can in words. That's why I have an urge to paint as well as to write.[17] (下線は筆者)

Roslynn D. Haynes は，アボリジニーの絵画に描かれる "landscape" について，それは単なる風景ではなく，精神的なものの反映 ("reflections of its spiritual significance")[18] であると述べているが，まさにこの批評は Sally Morgan の風景画にもあてはまる。Morgan は土地に刻まれたアボリジニーの歴史とアボリジニーのコスモロジーを描き出す。1986 年から 1995 年までの Sally Morgan の絵画を収録した画集 [19] の中から，彼女の自伝小説のテーマとも関わりの深いものをいくつか選んで紹介しよう。

まずは，"Terra Nullius" (1989), "Another Story" (1988), "My Grandmother's Country" (1989), "Corunna Downs Station" (1993) など，白人入植者たちがオーストラリアの土地とアボリジ

16　平和な時でさえアボリジニーは，夜自由に外出することも国土を自由に旅行することもできなかった。
17　*The Art of Sally Morgan* (Ringwood: Viking, 1996), p.6.
18　Roslynn D. Haynes, *Seeking the Centre: The Australian Desert in Literature, Art and Film* (Melbourne: Cambrige UP, 1998), p.17.
19　*The Art of Sally Morgan* (Ringwood: Viking, 1996).

ニーたちに加えてきた暴虐の歴史を語るものが挙げられる。"Terra Nullius" (fig.1) は，白人入植者たちのアボリジニー虐殺によって荒野と化したオーストラリアの大地を描いており，空にかかる虹は，アボリジニーたちの "survival" "spirituality" "hope" を表すという。[20] オーストラリア建国 200 年に描かれた"Another Story" (fig.2) は，白人のオーストラリア史の中で語られて来なかったもう一つの歴史，白人の牧場業を支え，繁栄させてきたアボリジニーの奴隷労働の過酷な歴史 ("how the pastoral industry was built on Aboriginal slave labour") (24) を描くものである。一見平和そうに見える牧場の邸の敷地の下には，虐殺された，あるいは酷使されて亡くなったアボリジニーたちの死骸が埋まっている。同様に牧場をテーマにした "My Grandmother's Country" (fig.3), "Corunna Downs Station" (fig.4) は，いずれも自伝の中で言及される祖母デイジーの生まれたコランナ・ダウンズ牧場を描いたものである。でっぷりと太った白人牧場主が踏みしめる大地の下には，虐げられたアボリジニーの労働者たちがひしめいている。後者 (fig.4) が描くのは，大地を這うように耕すアボリジニー労働者たちの苦しみと，この土地に眠るアボリジニーたちの過去の苦しみの堆積だろうか。 牧場をテーマにした Morgan のこれら一連の絵画は，オーストラリアの白人社会の発展の裏にあるアボリジニーの歴史を語っている。

My Place の出版と同年 1987 年に製作された"Taken Away" (fig.5) もまた，赤ん坊を取りあげられるアボリジニーの母親の悲しみを描いた社会的抗議の絵画である。白人の血をひくアボリジニーの子供を母親から引き離して，施設で教育を受けさせるという政府の同化政策についてはすでに述べた。（サリーの母グラディスも施設で育った。）この絵画はその政策に対する批判であると同時に，母なる「土地」を白人に奪われたアボリジニーの嘆きの歴史をそこに読みとることもできる。[21] 同じく 1987 年に描かれた "People United in Sorrow" (fig.6) には，"The grief that unites all Aboriginal peoples; the grief that comes from our history" (20) という注釈がついている。オーストラリアのすべてのアボリジニーの部族が悲しみの記憶によって結ばれること，さらには，苦難の歴史を介して世界のあらゆる人々が結ばれることを意味するこの絵は，先ほど論じたグローバルな「共感の共同体」というヴィジョンを裏付けるものではないだろうか。

Morgan の絵画は，ドリームタイムのコスモロジーのように，大地と天と人間，植物，鉱物，動物が一体となって結びついた世界を表象している。"Listen to the Land" (fig.7), "Sisters" (fig.8), "Ancestor Women" (fig.9) などに示されるように，人間は大地の一部であり，すべての人間は悲しみや苦悩によって結びついている。"Corunna Downs Station" や "Another Story" に描かれる鎖のように繋がった人々の表象も，おそらくそのことを示しているのだろう。川は大地の流す涙であり，人間の苦しみは自然の中に刻まれる。大地に立って耳を澄ませば，長い苦悩の歴史を語る大地の声が聞こえてくる："Listen to the land and

---

[20] "The rainbow represents our survival, our spirituality, our hope." (*The Art of Sally Morgan*, p.48)

[21] 他にもフランスの太平洋での核実験に対する抗議 "Ocean Fire" (1989) や開発による地球の環境破壊の危惧をテーマとした "Anxious Angels" (1989) など，政治的・社会的コメントをもつ絵画を描いている。

learn from it—it has its own voice."[22] Mudrooroo は "Land was synonymous with Aboriginal existence" (209) と述べ，アボリジニーにとって土地がいかに重要な精神的意味をもつかを主張しているが，Sally Morgan の絵画もやはり「土地」から切り離せない。アボリジニーにとって「土地」は歴史であり，彼ら自身である。

Sally Morgan は 1989 年に "Inside Story" (fig.10) という絵を描いている。その解説には，"[t]he history of Aboriginal peoples which has not been told" (62) とある。Morgan の伝記の言語化されたテクストの空隙には，まだ語られない歴史が内包されていることを我々は忘れてはならない。大地の奥深くで眠る種子のように。いつか発芽するときを待って。

4．Mudrooroo: *Wild Cat Falling* (1965), Ruby Langford Ginibi: *Haunted by the Past* (1999) [23]

Janet Frame に代表されるニュージーランド小説において，社会批判のトポスとなるのは精神病院であったのに対して，オーストラリア文学においては，それは刑務所である。Chris Cunneen は，アボリジニーの逮捕・投獄率が白人オーストラリア人に比べてきわめて高く，服役中に死亡する割合も非常に高いことに注目し，国家構成からアボリジニーを排除するシステムとして警察権が働いていることを指摘している。[24] "Genocide is not over" という Ginibi も，大虐殺時代は終わっても，未だにそれは形を変えて続いていると述べている。Mudrooroo が 1965 年という早い時期にアボリジニー最初の小説を出版したとき，描いたのは刑務所から出たところのアボリジニー少年の声であった。服役中に作家活動を始めた Kevin Gilbert など，アボリジニー作家は刑務所との関わりが深い。アボリジニーの犯罪小説における自己表象も考察したいテーマの一つであるが，これは次の機会に譲ろう。

5．おわりに

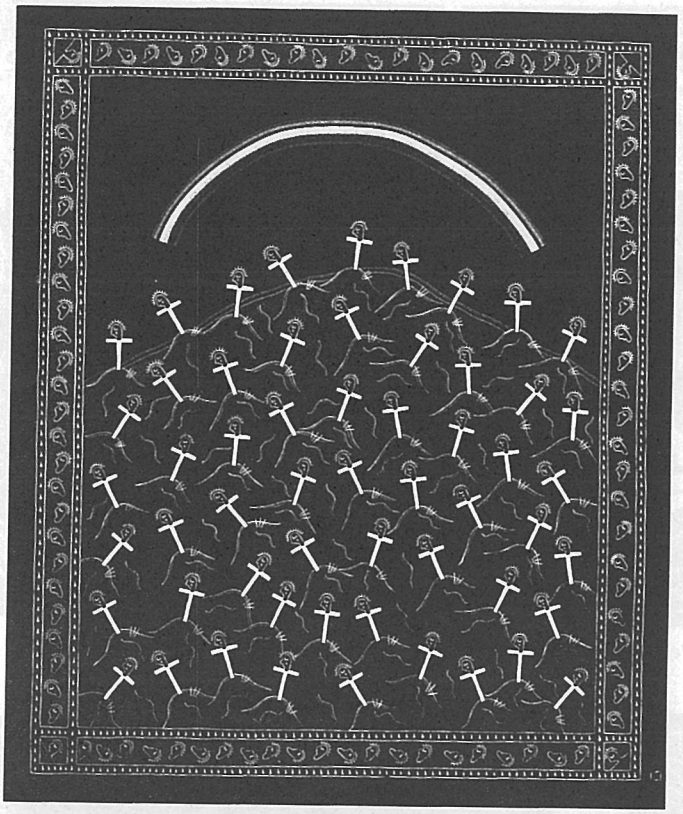
以上，代表的なアボリジニー作家である Mudrooroo や Sally Morgan のエッセイ，自伝小説，絵画を相互補完的に読む（解釈する）ことによって，現代オーストラリアにおけるアボリジニーの自己表象の一側面を論じてみた。とても大きなタイトルをつけてしまったが，この報告書は勿論そのほんの一部を論じるものに過ぎない。*Wild Cat Falling* (1965) を出版した後，1970 年代から 1980 年代にかけて沈黙がちであった Mudrooroo は，最近 1990 年代後半から，立て続けにエッセイや小説（入植時代のオーストラリアを舞台にした"Ghost Dreaming series"）を出版している。冒頭に引用した 1995 年のエッセイにあるように，やっと「癒やしの時代」(a time of healing)，歴史を声に出して自由に語れる時代が来たのだろうか。アボリジニーの作家には Sally Morgan の他にも，Kevin Gilbert など，視覚芸術の方面で活躍している作家がいる。今後はそのような作家も含めて，さらに考察を続けたい。

---

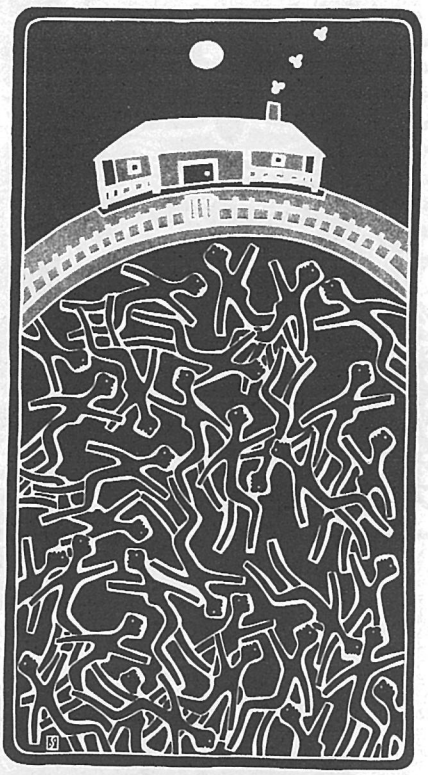
[22] "Listen to the Land"の絵に付された Morgan の解説。(*The Art of Sally Morgan*, p.66)

[23] Mudrooroo, *Wild Cat Falling* (Sydney: Harper Collins, 2001). Ruby Langford Ginibi, *Haunted by the Past* (St Leonards: Allen & Unwin, 1999)

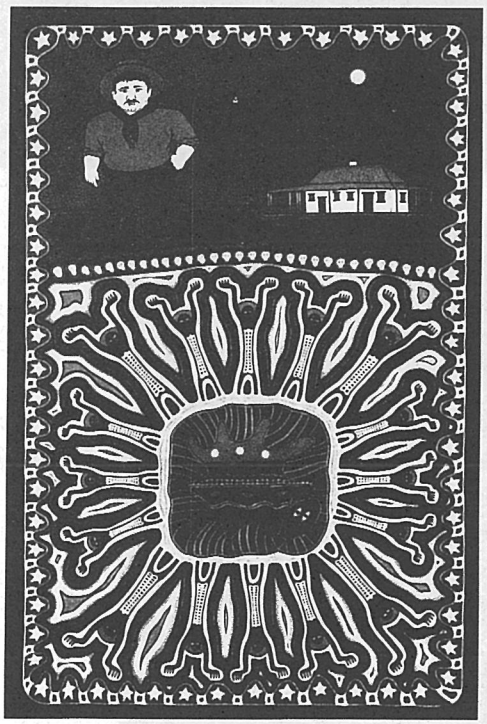
[24] Chris Cunneen, *Conflict, Politics and Crime: Aboriginal Communities and the Police* (Allen & Unwin, 2001).



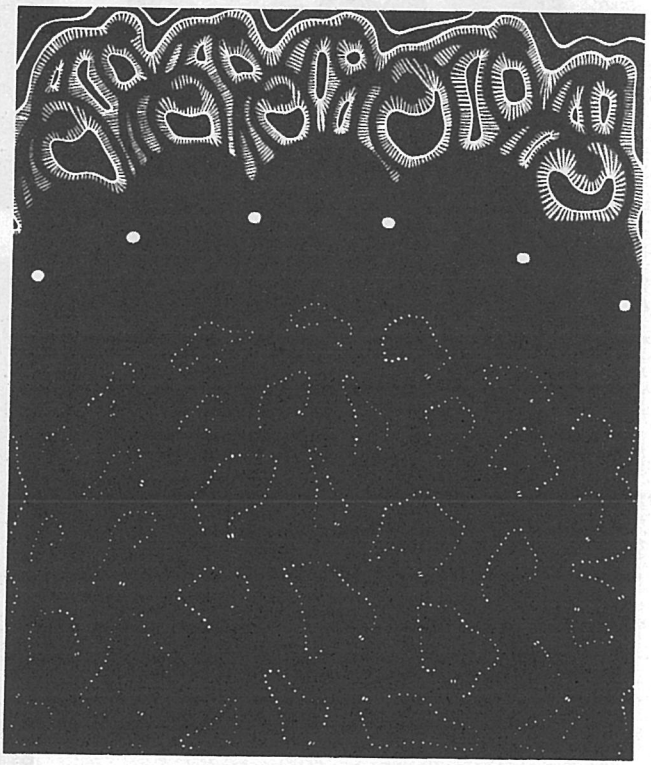
1．*Terra Nullius* 1989



2．*Another Story* 1988

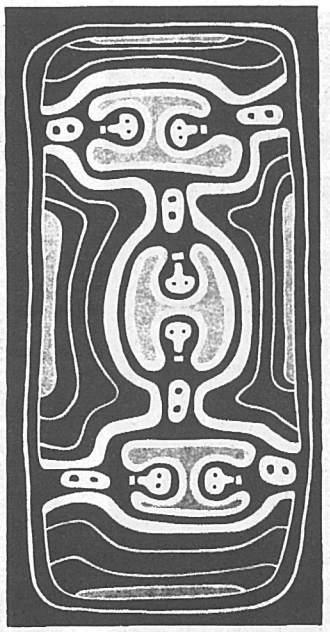


3．*My Grandmother's Country* 1989



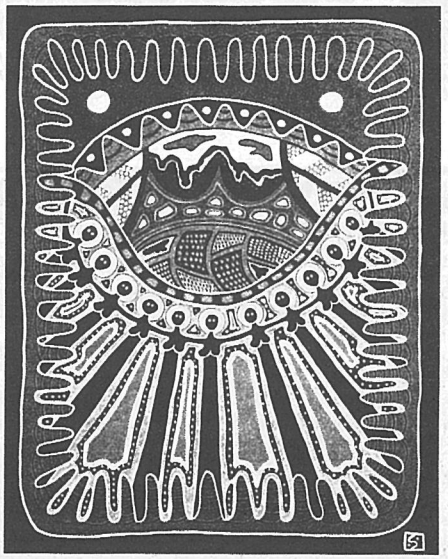
4．*Corunna Downs Station* 1993

5．*Taken Away* 1987

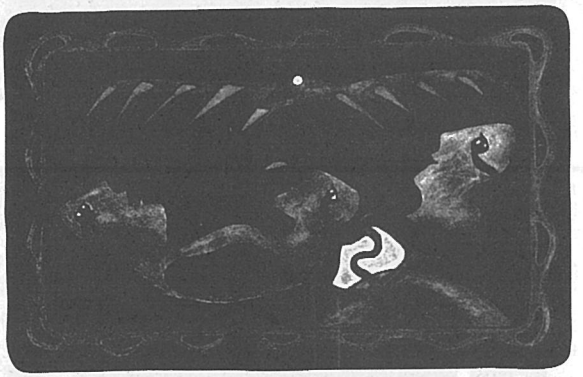


6．*People United in Sorrow* 1987

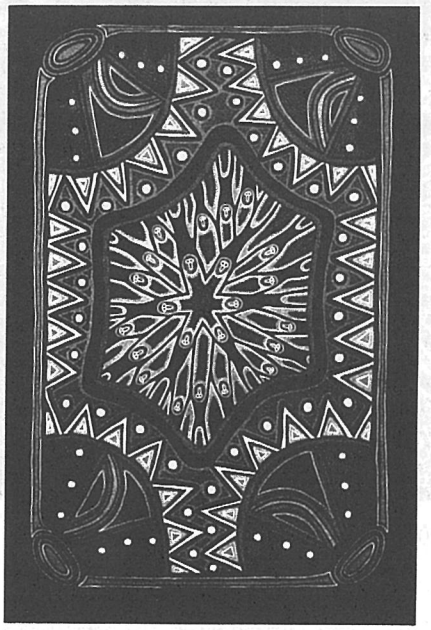
7．*Listen to the Land* 1989



8．*Sisters* 1989



9．*Ancestor Women* 1995



10. *Inside Story* 1989